皇學館大学研究開発推進センター紀要　第八号
令和四年三月一日発行（抜刷）

論文

日本書紀研究小史――テキストと注釈の歴史――

荊木美行
浦野綾子

論文

日本書紀研究小史――テキストと注釈の歴史――

荊木美行
浦野綾子

□要旨

『日本書紀』は、完成からすでに千三百年以上が経過しており、その間、さまざまな研究が積み重ねられてきた。小論では、こんにちまで『日本書紀』がどのように読まれてきたかという、おおまかな流れを俯瞰するようつとめた。『日本書紀』は完成直後からその研究会が開催されたが（日本紀講書）、これはもっぱら漢文で書かれた同書をいかに訓読すべきかという点に重点が置かれていた。中世になると、両部神道による『日本書紀』の研究が盛んになり、神代巻に対する新たな解釈が生まれ、それが十五世紀後半に登場する吉田神道にも影響を与えた。つづく江戸時代は、儒学が繁栄した時代であり、儒者による『日本書紀』研究が隆盛を極めた。とくに、『日本書紀』の注釈では、山崎闇斎に始まる垂加派の人びとが目覚ましい成果をあげた。しかし、江戸中期以降は、次第に国学者による古典研究が擡頭し、賀茂真淵以降は、『日本書紀』よりもむしろ『古事記』が重んじられた。やがて、後期になると、伴信友らによる『日本書紀』の実証的な研究が開花し、それが明治以降の科学的な『日本書紀』研究へと繋がっていく。

こうした注釈作業は、『日本書紀』のテキストの普及と密接な関係がある。『日本書紀』の写本は卜部家の人々の努力によって伝えられたが、江戸時代になると、それをもとにした版本が相次いで刊行された。その結果、多くの人々がテキストを容易に入手することができるようになり、それが研究の拡大と深化をもたらした。

□キーワード

日本書紀　神代巻　日本紀講書　日本書紀私記　両部神道　吉田神道　垂加神道　国学者

はじめに

『日本書紀』は完成から一昨年、すなわち令和二年までの間にすでに千三百年が経過している。したがって、その研究や注釈にも相当の積み重ねがある。それを僅かな時間ですべて紹介するのは不可能なので、小論では、完成から千三百年のあいだ、『日本書紀』がどのように読まれていったのかという、おおまかな流れを中心にのべることにしたい。

本論に入る前に、いくつか注意すべき点についてのべておく。

最初は、「注釈」という用語である。「註釈」というふうに言偏のチュウを用い

ているものもあるが、この「註」という字には字義・文意を解釈するという意味である。『廣韻』など、古い中国の字書も「疏」「解」の意だと説明している。ただ、現在では、一般に「注ぐ」という字が用いられている。これは言偏の「註」が当用漢字に含まれなかったので、その代用として「注」を用いたと説明されている。それは事実だが、実は「注」もはやくから字義を解釈するという意味に用いられている。長澤規矩也氏によれば、「註」と「注」はもともとは別の字で、注釈とは土に水を注いでやわらかくするように、言葉をやさしく、わかりやすく説明することだから、さんずい偏の「注」でもよいのだという。[1]であるから、どちらかが誤りというわけではない。そこで、小論では書名を除き、は「注」に統一している。

つぎに、これはいささか不名誉なことだが、筆者（荊木）は、最近になって、『日本書紀』に関する考え方を若干修正した。

周知のように、『日本書紀』のその完成・奏上のことは、『続日本紀』養老四年（七二〇）五月条に「是より先、一品舎人親王、勅を奉けたまはりて日本紀を修む。是に至りて功成りて奏上す。紀卅巻・系図一巻なり」と明記されており、完成の年次や当時の編輯総裁については疑う餘地はない。

この記述を素直に読めば、完成した「日本紀」には「紀三十巻（こんにちいう本文三十巻を指す）」と「系図一巻」とが存在したことになる。筆者も、そう受け取り、「日本紀（＝日本書紀）」とは「紀卅巻」と「系図一巻」とから構成されるものであって、「紀三十巻」と「系図一巻」とは不可分であると信じていた。しかし、いろいろな史料を綜合的に判断すると、ここに記された「日本紀」は『日本書紀』の別名ではなく、国史を意味する普通名詞として使われていると考えるようになり、「紀卅巻」と「系図一巻」とは完成時から別のものだったという結論に辿り着いた。

むろん、ともに撰国史所で編纂され、同時に完成している点を考慮すると、両者の間になんらかの関係があったことは間違いないのだが、現在では、『日本書紀』は当初から「紀卅巻」のみであって、「系図一巻」は別物であるという考えに落ち着いている。したがって、これまで書いたもののなかで「完成当初の『日本書紀』には「系図一巻」が存在した」というふうに記述した点は訂正をする。いまさらの変説は見苦しいが、その点をご了承いただきたい。[2]

最後にいま一つ本論に先立ってご承知おきいただきたいのは、実は『日本書紀』そのものも一種の注釈書・研究書だということである。『日本書紀』は、時代によっては神道の経典のような扱いを受けているが、本来は純然たる歴史書である。つまり、日本という国がどのようにして出来たのか、そこを天皇とその子孫が統治していく正統性はどこにあるのかということが、大きなテーマになっているのである。『日本書紀』の編纂が始まったのは七世紀後半の天武天皇の時代のことだが、当時歴史や神話・伝承を記録した書物は帝紀と旧辞をはじめとして、いろいろと存在した。それらのなかから正説を採り、歴史を構成していく作業は困難を極めたと思われるが、『日本書紀』は、そうした修史事業の産物である。それゆえ、『日本書紀』は、編纂に携わった人々が自国の歴史について研究した、いわば報告書であり、そこには編者の思想や史観といったものが反映されている。

たとえば、『日本書紀』の巻第一・二神代上下は、多くの一書を引用している。いまそれらをみると、『日本書紀』の編纂室には、神話を記した旧辞のたぐいが複数集められていたことがうかがえる。その取捨選択こそが、編者の見識を問われるところだが、多くの異伝に目を通し、そこから正説を組み立てる作業は容易ではない。いずれの説を是とするか、編者の間で意見の一致しないケースも少なくなかったであろう。

神代巻では、幾多の資料をもとに正文を作成はしたものの、異説を捨てるに忍びなかったとみえて――あるいは正文に自信がもてなかったのか――異伝を「一書曰」という形でかなりの数救済している。こうした異説を附加して正文の理解

を助けるというやりかたは、一種の注釈といってよい。[3] 後世の神代巻の注釈書には、先行諸説を当該箇所にかけて羅列する体裁のものが多いが、これはあるいは神代巻の一書の体裁に倣ったものかも知れない。

また、『日本書紀』は天皇ごとに一巻を立て、治世の出来事を編年で記すのを原則としているが、一つ例外がある。それは、巻第九が皇后である神功皇后の巻となっている点である。『日本書紀』がこうした例外を設けている理由については、諸説があるが、筆者は『日本書紀』の編者は、中国の歴史書を読んで、わが国にもかつて卑弥呼という名の女王が存在したという事実を知り、それが誰にあたるのかを考えたのだと思う。その結果、卑弥呼を神功皇后に当てるとともに、天皇に準じてわざわざ一巻を設けたのだと思う。[4]

一、古代の『日本書紀』研究

さて、以上のような諸点をお断わりしたうえで、注釈の歴史に入ろう。

『日本書紀』の研究・注釈として、その筆頭にあげられるのは、いわゆる日本紀講書と日本書紀私記である。『日本書紀』が完成した翌年、すなわち養老五（七二一）年にはじまり、[5] 十世紀半ばまで、平均すると約三十年の間隔で都合七回、「日本紀講書」とか「日本紀講筵」とか呼ばれる『日本書紀』の研究会、勉強会が宮中で開かれた。紀伝道に秀でた人物が講師となり、『日本書紀』について講義をおこなうのだが、これが『日本書紀』研究のはしりだと云える。

さいわい、講書の際に講師が作った講義ノートや、講筵に列していたものがとった筆記録がこんにち部分的に残っている。それが、日本書紀私記である。鎌倉時代に出来た『本朝書籍目録』には、養老五年私記（一巻）・弘仁四年（八一三）私記（三巻、多人長撰）・承和六年（八三九）私記（菅野高平撰）・元慶二年（八七八）私記（一巻、善淵愛成撰）・延喜四年（九〇四）私記（藤原春海撰）・承平六年（九三六）私記（矢田部公望撰）・康保二年（九六五）私記（橘仲遠撰）など、各回の日本書紀私記の存在したことがみえている。

このうちの二つが、日本書紀私記甲本・丁本という名称で、新訂増補国史大系の第八巻に収められている。甲本は、弘仁年間の二度目の講書の講師を務めた多人長の残したものである。ずいぶん形が崩れているが、巻頭に附されている弘仁私記序とともに、弘仁講書の私記であることがわかっている。[6] 丁本は、『日本紀略』承平六年十二月八日・二十四日、天慶六年（九四三）十二月二十四日条にみえる承平度の講書の記録である。漢文体で記され、問答形式をとりつつさまざまな問題を論じている。

ほかにも、のちほど登場する十三世紀末に卜部兼方が著した『釈日本紀』にも、多数の私記が引用されているが、これら私記の内容から、講書でどのような講義がおこなわれたのか、ある程度把握することが可能である。講書の最大の目的は、おそらく『日本書紀』をいかに訓むかという点にあったと思われる。

『日本書紀』は、さきにものべたように、帝紀や旧辞といった書物を材料としているが、それらの多くは国語、すなわち大和言葉で記されていたと考えられる。大和言葉は、われわれに馴染みの深いもので云えば、祝詞や宣命の文章である。それを漢文に〝翻訳〟したのが『日本書紀』なのだが、本来は大和言葉で訓むべきものと考えられていたようである。であるから、漢文で書かれた『日本書紀』をいかにして国語で訓むのかというのが、講書のいちばんの狙いだったと思われる。講書が『日本書紀』完成の翌年に直ちに開催されていることをみても、出来上がった漢文体の『日本書紀』をどう訓読するかというのが、当時の人々の大きな課題だったようである。

講書の記録である日本書紀私記は、こんにちわれわれが『日本書紀』を読む際にも重要な参考文献である。坂本太郎氏は、「書紀の研究史を述べるならば、その第一ページに古代の講書と、その所産である私記とをあげなければなるまい」[7]

と書いておられるが、この点は筆者も同感である。

しかし、こうして七回も続いた日本紀講書も、残念なことに、律令制の衰退とともに、康保二年（九六五）を最後に杜絶する。日本紀講書がおこなわれなくなると、『日本書紀』の研究や注釈はしばらく停滞する。ただ、そうしたなか、天養元年から平治四年（一一四四～一一五九）ごろに藤原通憲が『信西日本紀抄』という『日本書紀』の注釈書を著わしているのは、特筆に値する。[8] 同書については、國學院大學におられた中村啓信氏が同大学の所蔵本によって詳しく紹介されているが、『日本書紀』の注釈書としては「日本書紀私記」についで古いものである。同書は、『日本書紀』の語彙を抽出した辞書的性格を有しているが、ただ惜しむらくは、それほど詳しいものではない。

また、このほかにも、歌学の方面から『日本書紀』が取り上げられることがあったようである。[9] 大治五年から承元四年（一一三〇～一二一〇）ごろに、顕昭という歌人が『日本紀歌註』という『日本書紀』の歌謡を対象とした注釈を残している。この本は、後述の『釈日本紀』和歌部にも引用されている。また、弘安元年から十一年（一二七八～一二八八）ごろ、寂惠が『日本紀歌抄』を著しているが、これも歌謡のみの注釈である。

二、中世における『日本書紀』の注釈作業

以上、日本紀講書が衰えたあと、『日本書紀』の研究や注釈が振るわなかったことをのべたが、中世になるとちがった形で『日本書紀』の研究が盛んになる。こうした古典研究の機運は、蒙古襲来という国家的危機に直面することによって国家意識が昂揚し、歴史への関心が高まった結果だと云われている。

この時代の『日本書紀』研究には、大きく分けて二つの系統があった。それは、僧侶によるものと、神道家によるものとである。

まず、僧侶の手になる注釈からのべたいが、この系統は、両部神道による『日本書紀』研究を指す。よく知られていることだが、九世紀以降、仏教側から、神々とは仏や菩薩が衆生を救うためにとった假の姿であるとする本地垂迹説が広まり、次第に仏教の教義によって神祇の体系が包括されるようになる。このうち、真言密教の教理によった神道説が両部神道である。

真言密教では、大日経にもとづく胎蔵界は大日如来の理性を表し、金剛頂経にもとづく金剛界は大日如来の智慧を表すとし、宇宙の真理をこれら両部として把握している。両部神道では、これを神宮に当て嵌め、内宮とその祭神天照大神を胎蔵界、外宮とその祭神豊受大神を金剛界とし、両者はともに大日如来が姿をあらわしたものだとする「二宮一光（＝大日如来）」の理を唱えた。

両部神道は、平安時代末期から鎌倉・南北朝時代にかけて伊勢の神宮周辺で形成されたが、その過程で、仏教の灌頂に倣った神祇灌頂と呼ばれる方法で、師から弟子にその秘伝が授けられた。この灌頂の際に伝授されたのが、『日本書紀』神代巻に詳しい注説を加えたものや、両部神道の奥義を記した『麗気記』という秘伝書である。

こうした潮流のなかで生まれたのが、弘長二年から暦応三年（一二六一～一三三八）ごろ、真言密教の学僧で金沢称名寺二代住持釼阿が著した『日本紀私抄』である。両部神道系の『日本書紀』の注釈としては早い例であるが、のちに応永元年（一三九四）ごろ、浄土宗第七祖聖冏が書いた『日本書紀秘抄』には両部神道の思想がよくあらわれている。

また、応永二十六年（一四一九）良遍という僧侶が神代紀の講義を行い、それを聴いた頼舜が『日本書紀巻第一聞書』を残している。高野山の櫻池院や広島県三原市の御調八幡宮などにその写本が残るが、[10] これも両部習合思想が濃厚である。ほかに、伊勢の神宮文庫には、応永三十年から三十三年ごろ（一四二三～一四二六）に道祥（荒木田匡興）が三河の鳳来寺の僧融慶の持参した『日本書紀

私見聞（しけんもの）』を写しているが、[11]これも神祇灌頂との関係が想定されている。

以上の注釈書で注目したいのは、『日本書紀巻第一聞書』や同じく良遍が講述した『麗気聞書』に反本地垂迹説の傾向がみられることである。『麗気聞書』には、

凡ッ本地垂迹ト云事、神道ニハ更無之、只此国三世常恒ニ跡ヲ言マテ也、或神書見ルニ、天竺ニハ仏ヲ本地ト言、和国ニハ神本ト言ト書ケリ、師推知スルニ其理有之、謂天照大神化シ給テ浄飯王ノ太子ト生ル、和国相承神道ヲ、詞ヲ替テ五時八教等ト説給ヘリ、釈尊ハ大神ノ所化ナレハ仏垂跡ト言足レリト云々、（『神道大系論説編　眞言神道（上）』〈神道大系編纂会、平成五年十二月〉所収、二一九頁）

とあり、同様のことは『日本書紀巻第一聞書』にもみえているが、「本地垂迹ト云事、神道ニハ更無之」とのべ、さらに浄飯王の太子（釈迦）が天照大神の化身だとするなど、あきらかに本地垂迹説における神仏の関係を逆転させた発想である。吉田兼倶（よしだかねとも）が神本仏迹（しんぽんぶつじゃく）の立場をとったことは、このあとのべるが、久保田収氏の説によれば、兼倶の反本地垂迹説は、この良遍の説に着想を得たもののようである。[12]二人の直接の関係は不明だが、思想上の連続性が認められることは久保田氏の指摘されるとおりである。それゆえ、後述の吉田神道と両部神道とは密接に結びついていると評価できよう。そこで、つぎにその神祇道にあずかる人々の残した神代紀の研究・注釈について考えてみたい。

この系統の注釈でもっとも注目されるのは、正安三年（一三〇一）に卜部兼方が著した『釈日本紀』である。同書は、建治（けんじ）元年（一二七五）以降この年までの間に執筆された。兼方の父兼文が、文永・建治年間に前関白一条実経（さねつね）やその子摂関家経に『日本書紀』を講義した際の筆記を兼方が整理・編輯したもので、さきに紹介した日本書紀私記も多数引用されている。ただ、従来の日本書紀私記が『日本書紀』の巻次を追って順にその字句について注釈したのとはちがい、全体を開題・注音・乱脱・帝皇系図・述義・秘訓・和歌の七部門に分けて、『日本書紀』の成立に始まり、字句の訓みや解釈について緻密な叙述を施したものである。日本書紀私記を始めとする、いろいろな文献からの引用がほとんどで、各地の風土記など、こんにちではみることのできない文献を豊富に引用している点は貴重である。兼方自身の独自の説というのは少なく、日本書紀私記の集成といった観が強いので、高い評価を与えない研究者もおられるが、筆者は、坂本氏が「書紀研究のまとまった型を示したという点で、高い価値をもつ」とのべておられるのに賛成である。[13]

この『釈日本紀』でとくに注意しておきたいのは、神代紀を重視している点である。『日本書紀』では神代巻は全体の一二％ほどの分量を占めるに過ぎないが、『釈日本紀』の述義の部では全体の三六％が神代巻の注釈にあたられており、述義において神代巻が強く意識されていたことが知られる。ここに引かれた私記は神道的色彩が濃厚であるが、これは兼文が卜部氏の人間だったとこと、当時は神道思想が支配的であったことが、そのおもな理由だと考えられる。[14]

神祇官に仕えてきた卜部氏には『日本書紀』をはじめとする神道関係の貴重な文献が数多く伝えられていた。兼方が書写したという『日本書紀』巻一・二の写本が現存するが、これには弘安九年（一二八六）の奥書があり、しかも欄外や紙背には夥しい注記や裏書があり、兼方が神代巻をよく研究していたことを示している。卜部氏には、ほかにも、乾元二年（一三〇三）に兼夏が書写した巻一・二の写本や、天文八年（一五三九）に兼右が書写した巻三から三十までの写本が伝えられている。[15]卜部氏（吉田家）は「日本紀の家」と云われるが、古くから『日本書紀』やそれに関聯した文献を広く蒐集し、深く研究していたことは、その名に恥じない。

『釈日本紀』の説明にいささか紙幅を費やしたが、これについで正平二十二年（貞治六年、一三六七）に忌部正通（いんべのまさみち）の『神代巻口訣』が現れる（ただし、この本については近世初頭の成立だとする説もある）。[16]この本は、後世に大きな影響を与えたという点で注目されるが、以後の『日本書紀』の注釈書も、これに倣って神代巻のみを

対象とするようになる。

康正年中（一四五五～一四五七。ただし、文明五年〈一四七三〉に兼良みずから改訂を施す）に一条兼良が書いた『日本書紀纂疏』も、後世に大きな影響を及ぼした注釈書だが、これも神代巻のみを対象としたものである。神儒仏一致（三教一致）の思想であり、仏書を豊富に引用し、両部神道の立場から注釈を施しているから、あるいは、さきの仏教系の注釈書で取り上げるべきものかも知れない。しかし、『釈日本紀』の影響を受けている点や一条家と卜部氏との特別の関係[17]に鑑み、ここで紹介した次第である。

以上、中世における『日本書紀』研究の二つの系統を紹介したが、こうした二つの潮流を統合し、神本仏迹を明確に示し、仏教・儒教の根元が神道であると説いたのが、吉田兼倶である。彼が、文明年間（一四六九～八七）に自家の伝統を基礎にしつつ、活発な活動を展開して唯一神道を確立することは、ご承知のとおりである。彼は、『日本書紀纂疏』が出たのとほぼおなじころ、すなわち文明元年（一四六九）ごろに『日本書紀神代巻抄』（『兼倶抄』）を著わしているが[18]、ここには彼の三教枝葉花実説が明確に打ち出されている。

なお、兼倶の実子で清原家を継いだ清原宣賢も、天文五年（一五三六）に『日本書紀神代巻抄』（『環翠抄』）を著している。これは、兼倶の思想をほとんどそのまま受け継いだものでだが、兼良の『日本書紀纂疏』の説もずいぶん参酌している。

なお、中世の『日本書紀』の研究や注釈作業に関聯して、いま一つのべておくべきことがある。それは、いわゆる「中世日本紀」と云われるものである。これは、『日本書紀』や『先代旧事本紀』などに拠りつつも、本地垂迹説の立場からいろいろな形に改変・再編成された神話群の総称である。たとえば、鎌倉時代中期に無住によって書かれた『沙石集』の巻第一の一には、天照大神と第六天の魔王とのやり取りの話が出ているが[19]、これなどは中世神話の代表例である。

一九七〇年代から、こうした「中世日本紀」とか「中世神話」とか呼ばれるものを対象とした新たな研究が提唱されるようになった。最近、『日本書紀』撰上千三百年にあわせて山下久夫・斎藤英喜編『日本書紀一三〇〇年史を問う』（思文閣出版、令和二年六月）という本が出版されたが、中世の部の論考にはこれに関聯する研究も収録されている。

三、近世における『日本書紀』の注釈書

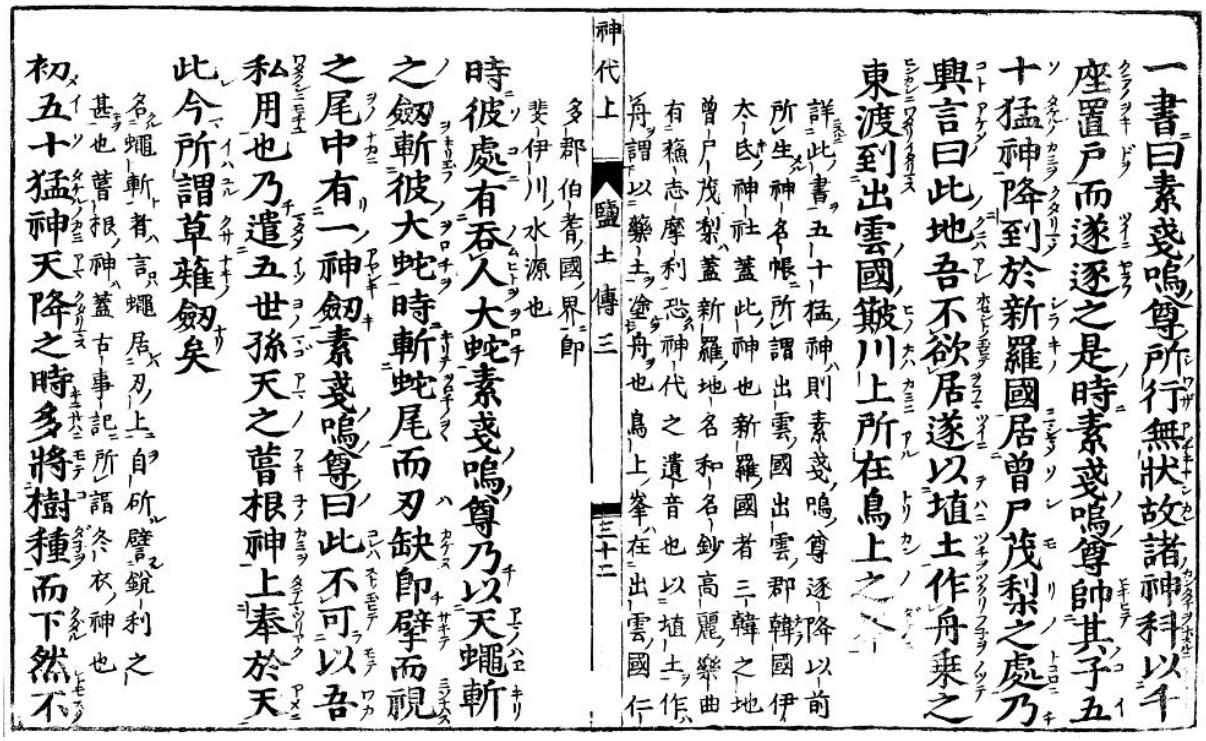
つぎに、江戸時代の『日本書紀』研究についてみておきたい。

近世に入ると、儒学の立場から神道を理解しようとする動きが生じてくる。むろん、前代の吉田神道などでも、神道説の構築に儒教が影響していたが、江戸時代になって儒学が幕府の庇護を受けるようになると、朱子学を中心に新たな神道説が唱道されるようになる。これが儒家神道と呼ばれるものである。

こうした儒家神道のなかでも、『日本書紀』研究ともっともかかわりの深いのが、山崎闇斎に始まる垂加神道である。闇斎は、はじめ僧籍にあったが、のちに還俗して朱子学を学んだ。それと並行して、はやくから神道を学び、とくに伊勢神道を出口延佳（度会延佳）・大中臣精長（河辺精長）に、吉田神道を吉川惟足に、忌部神道を石出帯刀に聞くなどして、在来の神道を取捨・集成して壮年になって独自の境地を開いたという。

周知のように、「垂加」とは、吉川惟足より与えられた霊社号に由来するが、これは『倭姫命世記』などにみえる「神垂は祈祷（祭祀の儀礼）を以て先と為し、冥加（神の加護）は正直を以て本と為す」という託宣からとったものである。

闇斎の教えは、神を朱子学の理と結びつけて理解するところに特徴がある。朱子学の理気二元論によれば、万物は理と気の二つの原理によって構成されており、理はこの世のあらゆるものを成り立たせる根拠であり、したがうべき道徳規範で


一書曰素戔嗚尊所行無狀故諸神科以千座置戸而遂逐之是時素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅國居曾尸茂梨之處乃興言曰此地吾不欲居遂以埴土作舟乘之東渡到出雲國簸川上所在鳥上之峯

詳此書五十猛神則素戔嗚尊逐降以前所生神名帳所謂出雲國出雲郡韓國伊太氐神社蓋此神也新羅國者三韓之地曾尸茂梨蓋新羅地名和名鈔高麗樂曲有蘇志摩利恐神代之遺音也以埴土作舟謂以藥土塗舟也鳥上峯在出雲國仁多郡伯耆國界郎斐伊川水源也

時彼處有吞人大蛇素戔嗚尊乃以天蠅斬之劒斬彼大蛇時斬蛇尾而刃缺即擘而視之尾中有一神劒素戔嗚尊曰此不可以吾私用也乃遣五世孫天之菅根神上奉於天此今所謂草薙劒矣

名蠅斬者言蠅居刃上自所擘之鋭利之甚也菅根神蓋古事記所謂冬衣神也

初五十猛神天降之時多將樹種而下然不

神代上　鹽土傳三　三十二

図1　秦山『神代巻鹽土傳』

ある。そして、天は理そのものであり、天から与えられた人間の本性（本質）もまた理であるとしている。闇斎は、神道における神をこの理にあたるものとして、人の心のなかには神が内在し、その神が心の本質をなしていると考えたのである。それゆえ、闇斎の教えは、神道と儒道との一致を説いたものだと云うことが可能である。神儒一致は林羅山らも説いたが、それを理論的に体系化したのが垂加神道の特色である。こうした垂加神道の教えは、国学が擡頭するまでは神道界最大の勢力だった。

闇斎が経典としたのは『日本書紀』神代巻と『中臣祓』であって、これについての講義録や著書が残されている。闇斎は天和二年（一六八二）に歿しているが、生前に『神代巻風葉集』という神代巻の注釈の草稿を残していた。それを、闇斎の歿後、弟子の若林強斎が完成し、さらにのちに玉木葦斎が改訂を施したのである。この『風葉集』は、神代巻に関する古来の注釈や解説を集録したもので、「垂加翁曰」「翁云」といった形でのべられる闇斎の説はそれほど多くはなく（七六五の引用のうちわずかに五七で、七・五％）、自身の主張は明確に打ち出されていないが、こうした姿勢には古来の神道説を集大成しようとした闇斎の方向性が示されているように思う。

ちなみに、『中臣祓風水草』は神代巻とともに闇斎が重視した『中臣祓』の注釈書である。最近出た西岡和彦氏の論文によれば、闇斎は同書において神武天皇紀以降の天皇紀も抄出引用しており、垂加派の神道家から『日本書紀』全巻を対象とした注釈書が出されるのも、この『風水草』の影響ではないかという。[20]『風水草』は『風葉集』とちがい、闇斎の生前に完成していたから、『風葉集』よりも闇斎の神道説の方向性をよくあらわしている面がある。そう考えると、西岡氏の指摘は興味深いものがある。

垂加神道は、闇斎の歿後も、弟子によってその道統が受け継がれていく。門人は多士済々でその活動は多方面にわたるが、神代巻の注釈作業に限って云えば、

享保三年（一七一八）には谷秦山『神代巻鹽土傳』が刊行され、あとにつづく垂加派の『日本書紀』研究に強い影響を与えた。同書は、語彙の正確な解釈を通じて神代巻を正しく読もうとする考証学的な姿勢を堅持しており、説明にも無駄がない。注釈書として好感がもてる。元文四年（一七三六）には玉木葦斎『神代巻藻塩草』が刊行されるが、これは、守井左京が闇斎以来の正説を記した草稿を、葦斎が編纂したものである。松本丘氏の研究によれば[21]、秦山の『神代巻鹽土傳』に拠った箇所も少なくないという。

この系統の『日本書紀』研究で注目すべきは、谷川士清が著した『日本書紀通證』三十五巻である。士清は玉木葦斎から神道の教えを受けているから、闇斎の弟子筋にあたる。彼は、伊勢の津の人で、寛保元年（一七四一）に着手し、宝暦元年（一七五一）に脱稿、同十二年に刊行している。同書の巻二～七の神代紀では、「兼良曰」「正通曰」「兼倶曰」「延佳曰」「垂加翁曰」など先学諸説を豊富に引用しているが、「重遠曰」として秦山の『神代巻鹽土傳』も多数引用している。『神代巻鹽土傳』同様、引用が簡潔・的確で、その意味では、『日本書紀通證』の神代巻は垂加派の神道説の集大成である。

しかし、『日本書紀通證』が神代巻にとどまらず、『日本書紀』全巻の注釈を試みた点はそれまでの注釈とは大きく異なる。なにしろ、『日本書紀』全巻の注釈書は『釈日本紀』以来五百年近くもなかったわけだから、それだけでも劃期的なことである。士清は、『倭訓栞』の著書があることからもわかるように、博学多通で、国語学や文献学に精通しており、『日本書紀通證』にはそうした彼の学問的素養がよくあらわれている。

『日本書紀通證』とならんでこの系統の『日本書紀』研究として特筆されるのは、河村秀根の『書紀集解』である。彼は尾張の人で、闇斎の弟子の正親町公通や玉木葦斎について神道を学んだ。文化元年（一八〇四）、秀根は子の益根の助力を得て『書紀集解』三十巻を完成させる。印本には天明五年（一七八五）の自序があるが、全巻の刊行完成は文化の初年と考えられている。

それまでの中世的な神秘的解釈を打破した点に特色があるが、同書は、本格的な出典研究の嚆矢と云うべき存在である。『日本書紀』は漢文で書かれているから、その文意を正しく理解するためには出典の詮索が重要であるが、それを徹底しておこなったのが、この『書紀集解』である。こうした出典論は、かなりのちになって、小島憲之氏がそれを発展させたが[22]、その端緒を開いたのは『書紀集解』である。

ただ、『書紀集解』も万全ではなく、『日本書紀』の「日本」の字は元来書名になかったとして勝手に『書紀』と改めた点や、『日本書紀』本文に挿入される分注の多くを後世の攙入として削った点などは、こんにちではとうてい認められるものではない。

さて、こうした儒家の『日本書紀』研究に対して、十八世紀から隆盛を極めたのが国学の流れを汲む『日本書紀』研究である。すでに十七世紀末の元禄四年（一六九一）に、大阪の僧契沖は徳川光圀の依頼を受け、『萬葉代匠記』という萬葉歌の注釈や『厚顔抄』という記紀歌謡の注釈書を著している。『厚顔抄』は全三巻からなり、上・中が『日本書紀』の歌を、下が『古事記』のそれを取り上げている。歌謡の数は『古事記』も『日本書紀』もおなじぐらいであるから（歌数は、『古事記』が百十二、『日本書紀』が百二十八）、契沖が『日本書紀』のそれに力を注いでいることがうかがわれるし、『日本書紀』歌謡を先にするという排列にも、彼の『日本書紀』を重んじる精神が現れているように思われる。こうした契沖の研究は、実証的な文献学的方法によるもので、あとにつづく国学者に大きな影響を与えている。

つぎにあげられるのは荷田春満である。彼は京都の伏見稲荷神社の神官の家に生まれたが、荷田家には神道と歌学の伝統があり、彼はその学問の宣伝と興隆とを目ざしていたという。春満の著述は記紀・風土記・律令など多岐にわたるが、『日本書紀』を重視し、数々の著作や講義録を残している。國學院大學が創立

百二十周年の記念事業として『新編荷田春満全集』全十二巻を刊行したが、同書の第二・三巻には未公開の資料もふくめ春満の『日本書紀』の講義録などが松本久史氏らによって翻刻されている。[23] そのほとんどは神代巻の注釈書や講義録であるが、彼が後世の解釈を捨ててもっぱら神代巻本文と一書によって研究すべきことを説いた点は注目してよい。

ただ、周知のとおり、つづく賀茂真淵[24]のころから、国学者は『古事記』を高く評価するように変わっていく。寛政十二年（一七九八）に本居宣長[25]が『古事記伝』全巻を完成し、こうした風潮は一気に高まる（刊行の完了は一八二二）。『日本書紀』は漢文で書かれているので漢心に泥んでいるので、上古のことを知るには国語を旨とした『古事記』によるべきだという考えは理解できるが、[26] だからといって『日本書紀』の短所ばかりをあげつらうという偏向した研究姿勢には好感がもてない。

もっとも、橘守部などは宣長に反対して『日本書紀』の優越性を主張しているし、宣長の歿後の門人平田篤胤[27]なども『古史徴開題記』において「一向に古事記をのみ善と思ふは非」とのべ、宣長流の『古事記』偏重の傾向を批判している。[28]

ところで、この『古史徴開題記』を読むと、篤胤が同時代の伴信友の学説から大きな影響を受けていることがわかる。有名な伴信友『比古婆衣』一の巻の刊行は、彼が亡くなった翌年の弘化四年（一八四七）のことだが、ここに収録されている「日本書紀考」（文政十年、一八二七）[29]や「日本紀年暦考」（天保三年、一八三二）、さらには壬申の乱を取り上げた『長等の山風』は、彼の『日本書紀』研究を代表する著作だが、[30] これらのなかで信友は「文献史料によりながら、その背後に存する隠れた事実を究明しよう」と試みている。[31] 信友の「日本書紀後世改刪説」はこんにちでは否定されているが、それでも彼の実証主義的研究はこんにちでも有益で、彼が実践した諸本の校合作業とともに、明治以降の科学的な『日本書紀』研究に繋がるものと云えよう。

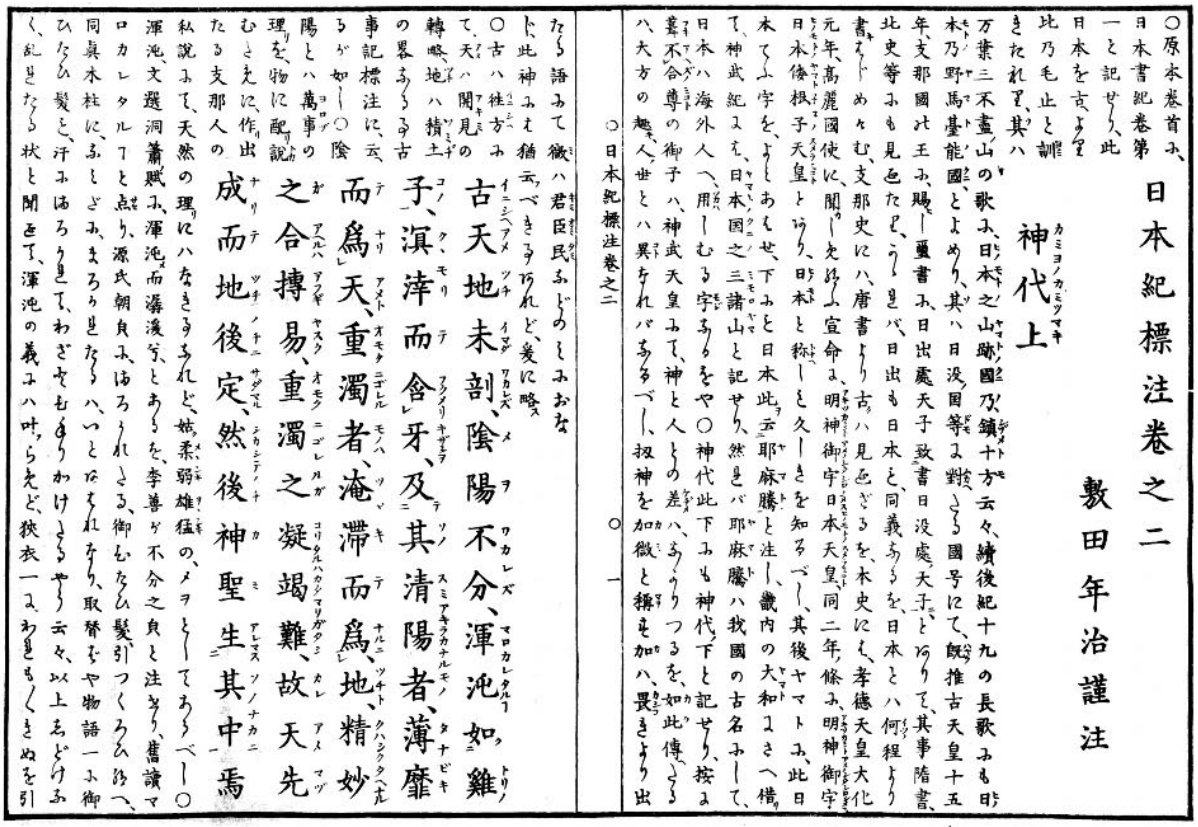
四、幕末・明治以降の『日本書紀』の注釈

幕末の国学者鈴木重胤は、四十九年の生涯に厖大な古典研究を残したが、なかでも『日本書紀傳』全三十巻と『延喜式祝詞講義』全十五巻は、質量ともに鈴木重胤の代表的な著作で、いずれも『鈴木重胤全集』に収録され、こんにちでもなお学界に裨益しつづけている。[32]

重胤の『日本書紀傳』については、弘化元年（一八四四）に重胤が著した『著撰書目』に、予定書目としてすでにその名がみえているが、実際には、嘉永六年（一八五三）九月十八日に開宴、同十一月十四日に起稿されたものである。文久二年（一八六二）四月二十六日に三十二之巻を脱稿しているが、重胤は翌年八月に暗殺されているから、[33] 以後は未完のままである。神代巻の途中で中絶したが、ことによると、重胤は『日本書紀』三十巻すべての注釈を志していたのかも知れない。

残された分をみても、短い時間で稿を組んだにもかかわらず、その内容は精緻で充実している。同書は、まず『日本書紀』の原文をあげ、つぎにその注釈を掲げるスタイルをとっているが、その注釈は、『日本書紀』に登場する地名・氏族・人名の考証から、訓読・語義・語源など多方面にわたり、関聯資料を豊富に紹介しつつ独自の解釈を示している。その縦横無尽の博引旁証は、驚嘆に値するのであるが、索引もデータベースもない時代にこれだけの文献を駆使し、必要な典拠をあたかも掌を指すがのごとく挙示してみせる重胤は、陳腐な表現であるが、超人的頭脳の持ち主だったと云えよう。

重胤の学説には、こんにちでも通用するものが少なくないが、この本にはたんに注釈書というレベルを超えて、読み物としての面白さがある。江戸から明治にかけての『日本書紀』の注釈書としては、前掲『日本書紀通證』や『書紀集解』、


○原本巻首ニ、日本書紀巻第一ト記セリ、此日本ヲ古ヨリ比乃毛止ト訓きたれり、其ハ万葉三不盡山の歌ニ、日本之山跡國乃鎮十方云々、續後紀十九の長歌ニも日本乃野馬臺能國とよめり、其ハ日没国等ヲ對スる國号にて、既ニ推古天皇十五年、支那國ハ王ヲ賜ヒ璽書ヲ、日出處天子致書日没處天子とかきて、其事隋書、北史等ニも見エたり、うら見バ、日出も日本と同義なるを、日本とハ何程より書スト雖ども、支那史ニハ唐書より古ハ見エざるを、本史ニも、孝德天皇大化元年、高麗國使ニ聞ヘたる宣命ニ、明神御宇日本天皇、同二年條ニ、明神御宇日本倭根子天皇といフ、日本と称シ久しきを知るべし、其後ヤマトヲ、此日本てふ字を、よしあるせ、下ふと日本此云耶麻騰と注し、畿内の大和ヲさへ惜て、神武紀ニ、日本国之三諸山と記せり、然ルバ耶麻騰ハ我國の古名ニして、日本ハ海外人へ用しむる字なるを、○神代此下ニも神代下と記せり、按ニ葬不合尊の御子ハ、神武天皇ニて、神と人との差ハ、あくまでつるを、如此傳へるハ、大方の趣、人世とハ異なれバなるべし、扨神を加微と稱を加ハ、最きまり出

○日本紀標注巻之二　敷田年治謹注

神代上

○古ハ往方ニて、天ハ開見の轉略、地ハ指土の畧ニて、古事記標注に、云るが如し、○陰陽とハ萬事の理を、物に配説むとて、作出たる支那人の私説ニて、天然の理ニハなきなれど、姑柔弱雄猛の、メヲ〳〵てあるべし、○渾沌、文選洞簫賦ニ、渾沌而潺湲、とあるを、李善が不分之貌と注せり、舊讀マロカレタルと点し、源氏朝顔ニ、はるられる、御むなし髪引つくろひ給へ、同真木柱に、ふるとぶ、まろ見たるハ、いとなれなり、取替ヘや物語一ニ御ひなし髪と、汗ニはろう見て、わざとも〻かけるやう云々、以上ニよりけふく、記見たる状と聞き、渾沌の義ニハ叶ひ、ら、ど、狩衣一ニ、あるもくきぬを引たる語ニて微ハ君臣民ニよりのもみおなし、此神ニも猶云べきなれど、姿ニ略ス

古天地未剖、陰陽不分、渾沌如雞子、溟涬而含牙、及其清陽者、薄靡而爲天、重濁者、淹滯而爲地、精妙之合搏易、重濁之凝竭難、故天先成而地後定、然後神聖生其中焉

図２　敷田年治『日本紀標注』

さらには後述の飯田武郷『日本書紀通釋』が有名であるが、重胤の『日本書紀傳』ももっと評価されてよい注釈書ではあるまいか。

さて、こうした、歴史記録として『日本書紀』を研究する機運は、明治以後いよいよ盛んになり、幾多の注釈書が登場する。

重胤の知己であった敷田年治は、明治二十四年（一八九一）に『日本紀標註』（小林林之助刊）という『日本書紀』全巻の注釈書を刊行している。また、同三十五年には、飯田武郷の『日本書紀通釋』全六巻が刊行されるが、こちらは先行学説の引用がほとんどで新味に掬すべき点は少ないと云われ評価は低い。

『日本紀標註』と『日本書紀通釋』をくらべると、注釈書にも書物としての運不運があることがわかる。『日本書紀通釋』のほうは、明治二十二年八月から同二十八年十月にかけて大八洲學會から刊行が開始されたのを皮切りに（ただし、これは未完）、昭和の末年まで、版元を変えつつ十数回に及ぶ出版・復刊があった。まさに『日本書紀』注釈書のロングセラーである。[34] これに対し、その十年ほど前に出た『日本紀標註』全二十六巻は、嵩高い和装本で扱いにくく、加えて発行部数も多くなかったとみえて、昨今ではこれを引用する研究者は稀である。

以上のほかにも、現在に至るまで、厖大な数の『日本書紀』の注釈書が編纂・出版されている。とくに先の戦争が終結するまでは、『日本書紀』は『古事記』とともに日本民族の精神的支柱となる神聖な古典とされていたから、さまざまな形のテキストや注釈書が編まれ、ある程度普及した。それらについては、荊木『日本書紀』に学ぶ』（燃焼社、令和二年三月）に網羅的なリストを掲げたが、そこからおもなものを紹介しておきたい。

まず、テキストに関しては、終戦までのものに限れば、以下のようなものがある。

①伴信友校訂『本朝六國史　日本書紀』全三冊（赤志忠七、明治十六年八月出版）

和装本。『日本書紀』全文の校訂本。第一冊は巻第一～七、第二冊は巻第八～十九、第三冊は巻第二十～三十を収録。のち明治四十年三月に郁文舎から他

の五国史と合冊して縮刷版が刊行された。

②岸本宗道（きしもとしゅうどう）・大宮宗司（おおみやそうし）校訂『日本書紀　全』（東京堂、明治二十五年八月発行）

『日本書紀』全文の校訂本。底本は寛文板本で諸本によって校合を施し、頭注の形で校異を記す。扉に「菊園舎藏版」とあり、奥附に印刷者近藤圭造、発兌所東京堂、大売捌博文館、関西発売元盛文館とある。巻頭に内藤耻叟（ちそう）の序がある。

③經濟雜誌社集『國史大系』第壹卷（經濟雜誌社、明治三十年二月発行）

『日本書紀』全文の校訂本。「凡例」によれば、「本書は故文学博士小中村清矩大人が安政の頃内藤廣前の校本を以て異同を註されしものに拠りて寛文の板本（流布本）に標註を加へ傍ら日本紀通證書紀集解等二三の書を参攷して校訂せり」とある。大正四年一月に、黒板勝美が再校訂したものが刊行されている。

④佐伯有義編『六國史卷一・二　日本書紀』（朝日新聞社、巻壹昭和三年十二月、巻貳は昭和四年四月発行）。

『日本書紀』の全巻について原文と頭注を掲げる。巻壹は寛文版本を底本とする『日本書紀』校訂本のうち、巻第十五までを収録し、巻貳は巻十六から三十までを収録する。巻壹巻頭には「日本書紀解題」を排し、巻貳巻末には附録として「日本書紀所見宮都並山陵一覧」「天武天皇紀賜姓一覧」などを掲載。のち、昭和十五年三月に上巻が、同年五月に下巻の増補版が刊行されている。なお、『明治聖德記念學會紀要』三八（昭和七年九月発行）掲載の佐伯有義「六国史の編修と古写本に就て」が掲載され、本書刊行の経緯について記されている。

⑤物集高見（もずめ）編『新註皇學叢書　第一巻』（廣文庫刊行会、昭和四年五月発行）

『日本書紀』全巻の原文と頭注。原文の末尾に「『日本書紀校異』「『日本書紀校訂所據諸本解説」を附す。『古事記』『古語拾遺』や風土記を併載。

このなかでも、比較的よく利用されたのは③・④ではないだろうか。古代史家の岸俊男氏もはじめて読んだ『日本書紀』のテキストはご尊父・熊吉氏の所持しておられた④だといい[35]、直木孝次郎は、「佐伯有義校訂の六国史が朝日新聞社から出ていたのを、古本屋でさがすほかなかったが、六国史のなかから『日本書紀』だけを端本でみつけだすことは、なかなかむづかし」く、「たいていの学生は、必要なときは大学の図書室で旧版の国史大系本（大正期刊行）か、佐伯有義校訂本をみることにして、平素は岩波文庫本〔荊木註＝『訓讀　日本書紀』全三冊〕であるませていた」と回想しておられる[36]。

たしかに、④はわずかであるが頭注が附されており、注釈書としても役に立つので、有益なテキストだったのではないだろうか。この本は、のちに佐伯有義校訂・標注『増補六國史』巻壹日本書紀上・巻貳日本書紀下（朝日新聞社、巻壹昭和十五年三月・巻貳同年五月発行）として増補版が出ているし、かなりのちの話だが、昭和五十七年七月には基本的名著の再評価を謳い文句としていた名著普及会より合本して復刻され、これまた好評を博した。今では見落とされがちであるが、嵩高い和装本にかわって手軽な洋装本の『日本書紀』が普及したことは、同書が広く読まれる原動力になったと思われる[37]。

つぎに、注釈書のほうだが、こちらは『日本書紀通釋』以降あまり出ていない。さきにあげた④・⑤には頭注が附されているが、絶対数が少なすぎてあまり読解の役には立たない。全巻にわたる注釈書としては、わずかに、飯田季治『日本書紀新講』上巻・中巻・下巻（明文社、昭和十一年十月発行）があるのみである。これは、飯田武郷校本による本文と正訓（読み下し文）・講（注釈）を掲げたものだが、飯田校本をそのまま用いていることからもわかるように『日本書紀通釋』の二番煎じで、けっして評価も高くはない。こうした状況だったからこそ、明治三十五年に出た『日本書紀通釋』が長く読み継がれることになったのであろう。

ところで、戦後、歴史研究における自由な発言が許されるようになると、『日

本書紀』の研究も盛んになることは、遍く知られている。這般の事情については、最近出た塩川哲朗「現代の『日本書紀』研究」という論文に詳しくまとめられているし[38]、筆者も言及したことがあるので[39]、詳細はそちらに譲る。

ただ、戦後になって、武田祐吉校注『日本古典全書　日本書紀』全六巻（朝日新聞社、昭和二十三年一月～昭和三十二年六月発行）や國史大系編修會編『新訂増補國史大系　日本書紀』前篇・後篇（吉川弘文館、前篇は昭和二十六年九月、後篇は同二十七年十二月発行）といった良質のテキストが出版されたことが、研究の伸展を促した点は特筆しなければなるまい。

さらに、注釈書のほうでも坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋（すすむ）校注『日本古典文学大系67・68　日本書紀』上・下（岩波書店、上昭和四十二年三月・下昭和四十年七月発行）[40]と小島憲之・西宮一民・毛利正守・直木孝次郎・蔵中進校注・訳『新編日本古典文学全集　日本書紀』①～③（小学館、①は平成六年四月、②は同八年十月、③は同十年六月発行）と、昭和後期・平成を代表する注釈書が刊行され、広く学界共通の財産となっている。いずれも、当代の国史・国文を中心とする一流の研究者が総力を結集させた注釈書だけに、学界に裨益するところが大きかった。注釈という作業は、『日本書紀』の個別研究のエッセンスを集約したものだから、こうしたすぐれた注釈書が刊行されたのは、とりもなおさず、戦後の『日本書紀』研究が深化したことを意味している。

ただ、どちらも古典の注釈シリーズの一冊として刊行されたものだけに、他巻とのバランスから種々の制約があったので、万全とは云えない。たとえば、日本古典文学大系には現代語訳・索引は附されていないし、新編日本古典文学全集にはそれらは備わっているが、ぎゃくに大系本にあるような原文の校異は省かれている。慾を云えばきりがないが、令和の時代には、存分に紙数を費やした独立の『日本書紀』注釈書が現れることを期待したい。

おわりに

以上、非常に駆け足で『日本書紀』が編纂されてからの同書の注釈の歩みを振り返ってきた。紙幅の制限から雑駁な紹介にとどまったことをお詫びしたい。

まだまだ書くべきことは尽きないが、最後に、これまでのべたことをいささか補足しておく。

筆者があらためて強調したいのは、こうした注釈書の歴史は、『日本書紀』そのもののテキストの普及と密接な関係にあるという点である。卜部氏が『日本書紀』の写本を写しつづけたことは先にも少しふれたが、最近も、渡邉卓氏が「卜部氏なくしては後世に『日本書紀』が伝わらなかったといっても過言ではないだろう」とのべておられるように[41]、卜部氏の功績は大きい。近世になって『日本書紀』のテキストが相次いで刊行されたのも、卜部氏の所持していた『日本書紀』の写本に負うところが大きい。慶長四年（一五九九）には『日本書紀』神代巻、いわゆる「慶長勅版」が刊行され[42]、ついで同十五年には全三十巻（いわゆる「慶長古活字版」）が上梓される。さらに、寛永元年（一六二五）には寛永版本三十巻が出版され、多くの人々が容易に『日本書紀』を手にとることができるようになったのである。

中世の『日本書紀』研究では、写本をみることのできるごく一部のひとだけが研究に携わっていたというのが実情だが、研究者層を広げるという点で、テキストの普及はきわめて重要な要素であった。研究しようにも、良質のテキストがないことには原文を読むことさえ叶わないのである。その意味で、明治以降の二度にわたる国史大系の刊行もそうだが、縁の下の力持ち的なテキスト作りに尽力した先学の努力に敬意を払い、感謝の誠を捧げなくてはならない。

敬意を払うという点では、過去のどの注釈書に対しても、それが編まれた時代

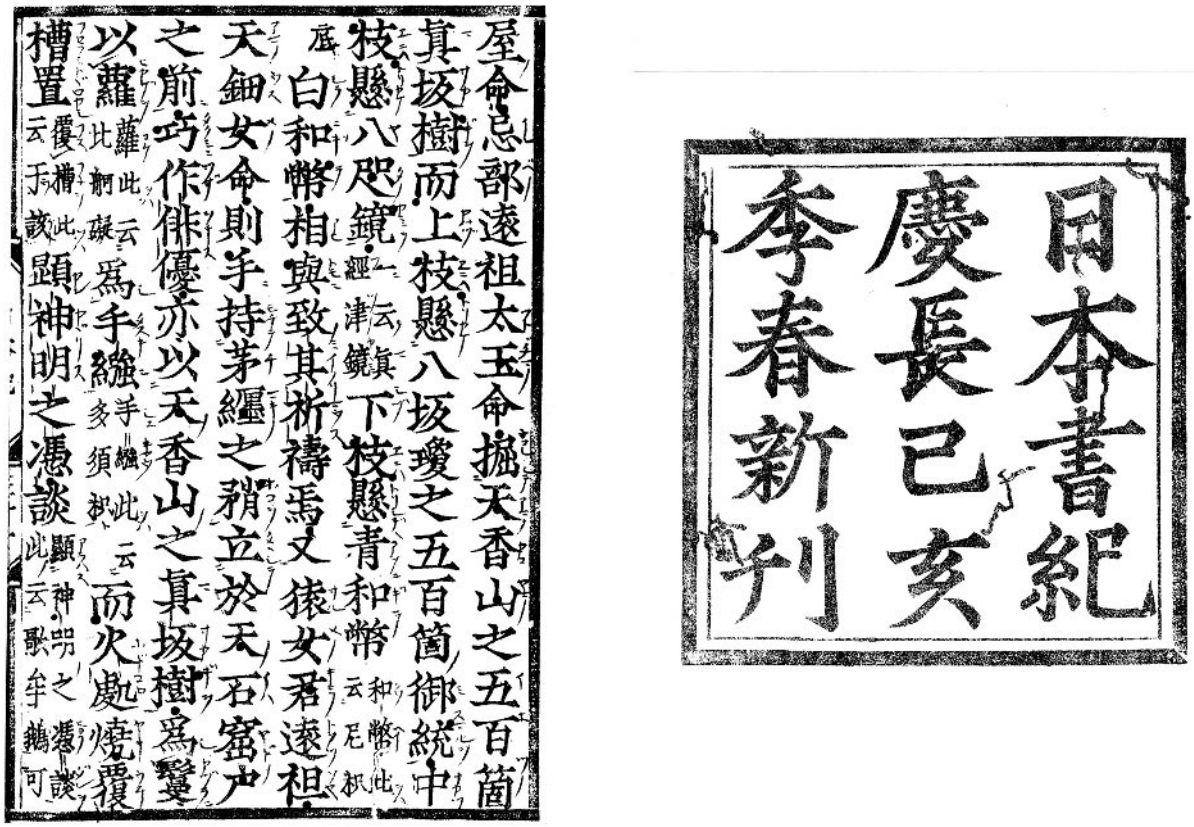


図３　慶長勅版『日本書紀』

性を考慮しつつ、公正な評価をすべきだと思う。

先にも紹介したように、中世においては神道家の手になる『日本書紀』、とくに神代巻の研究が盛んになり、同時に多数の注釈書を生んだ。これらは、つづく江戸時代の『日本書紀』研究にも活用されるが、巻三以降の部分を歴史記録として重んじるこんにちの歴史学者のなかには、家永三郎氏のように、「それらはすべて自家の神道教義に立脚した空理空論で埋められており、書紀研究のために今日読むに値するものは一つもないと言っても、言い過ぎではない」[43]とのべて憚らないかたもおられる。

たしかに、彼らの解釈には曲解や強引な附会があることは事実で、歴史記録として『日本書紀』を読解しようとする現代の歴史学者にはあまり役に立たないかも知れない。しかしながら、中世に生きた人々が日本の伝統を『日本書紀』、とくに神代巻のなかにもとめようとした態度は間違っていないし、それを否定することもできない[44]。しかも、家永氏が読むに値しないといってあげる『神代巻口訣』や『日本書紀纂疏』にも学ぶべき点は多いにあると思う。古典文学大系の『日本書紀』の神代巻の注釈には『神代巻口訣』の説は一箇所しか引用されていないが、『神代巻口訣』の名をあげていない注にも『神代巻口訣』の解説とよく似た記述が随所に認められる。「その程度の説明なら、六百年前に忌部正通がすでに『口訣』で書いていますよ」と云いたくなることも少なくないから、中世の注釈書もまんざら捨てたものではない。塩川氏が「これらの見解は列島における古代～近世に特有の思想的営み・信仰を等閑視しており、中世・近世の神道研究や古典研究を不当に低く見積もってしまっている」とのべておられるが、筆者もその考えに同意する[45]。

『日本書紀』の注釈についてはまだほかにも考えるべきことは少なくないが、それは別の機会に譲って、ひとまず擱筆することにしたい。

注

（1）長澤規矩也「南宋初年刊本周易注疏説明」（『長澤規矩也著作集』第十巻〈汲古書院、昭和六十二年十一月〉所収）一〇頁。ちなみに、同氏によれば、疏は「通ずる、開くといういみで、水路を切り開いて、水を通りよくするすみ、転じて、「注」をさらにやさしく説明した文」だという。

（2）この点に関する詳細は、荊木美行「〝日本書紀〟とはなにか」（『古典と歴史』一〇、令和三年九月）を参照されたい。

（3）念のためにいうと、神代紀の正文は、複数の「一書」を綜合して、『日本書紀』編纂の際にあらたにまとめられたもので、数ある「一書」のなかから一つを択んだというものではない（西川順土「日本書紀巻一巻二の「云云」の用例をめぐって」西川氏『記紀・神道論攷』〈皇學館大学出版部、平成二十一年三月〉所収）。

（4）『日本書紀』の編者が卑弥呼を神功皇后にあてたことについては、平田俊春「神功皇后紀の成立と日本書紀の紀年」（平田氏『日本古典の成立の研究』〈日本書院、昭和三十四年〉所収）を参照されたい。

（5）養老五年の日本紀講書の博士については『釈日本紀』巻一の「日本紀講例」は「博士。或云。不注」としているが、日本紀竟宴和歌（天慶六年）には「養老五年始講。博士従四位下太朝臣安麻呂」とあって、太安万侶の名をあげている。安万侶は『古事記』の撰者として有名だが、『弘仁私記』の序によれば、『日本書紀』の編纂にも舎人親王とともに携わっていたとある。これについては疑問視する声もあるが、『弘仁私記』序が記されたのは『日本書紀』完成からまだ百年足らずのことで、忘却されてしまうような昔の話ではないから、序の執筆者（多人長か）が祖先の顕彰のためにあえて事実を歪めて書くことは不可能だったはずである。ゆえに、筆者は、太安万侶の関与を認めてよいと考えているので、編纂スタッフの一人だった安万侶が養老五年の講書の講師を務めることはごく自然なことだと思う。

（6）この点については、粕谷興紀「日本書紀私記甲本の研究」（『藝林』一九―二、昭和四十三年四月、藝林會）・「大草香皇子事件の虚と実―『帝王紀』の一逸文をめぐって―」（『皇學館論叢』一一―四、昭和五十三年八月、皇學館大學人文學會）参照。なお、両論文は、荊木美行編『粕谷興紀日本書紀論集』（燃焼社、令和三年八月）に再録された。

（7）坂本太郎『六国史』（『坂本太郎著作集』第三巻〈吉川弘文館、昭和六十四年一月〉所収）一〇二頁。

（8）國學院大學所蔵の『信西日本紀鈔』については、中村啓信『信西日本紀鈔とその研究』（高科書店、平成二年六月）に全文が翻刻されているほか、伊藤東愼・大塚光信・安田章共編『両足院日本書紀抄』（臨川書店、昭和六十一年一月）・小林千草『清原宣賢講「日本書紀抄」本文と研究』（勉誠出版、平成十五年三月）がある。

（9）十二世紀の中頃に書かれた藤原範兼の『和歌童蒙抄』巻三には『日本紀問答』という書物が引用されている。『和歌童蒙抄』は『萬葉集』などにみえる和歌を取り上げ考証したものだが、ここに『日本書紀』の注釈と思しき本が引用されていることは注目してよい。『日本紀問答』については、久保田収氏が「本書の著者、成立、内容の詳細はわからないが、おそらくは上代末期ごろの著作で、当時における『日本書紀』への関心を伝へる一例であらう」とのべておられる（「中世における日本書紀研究」『神道史研究』二二―四、昭和四十九年十一月、四頁）。

（10）櫻池院本については、中村啓信「日本書紀巻第一聞書」（『神道宗教』五五、昭和四十四年十月）に、御調八幡宮本については山本秀人・山本真悟「御調八幡宮蔵日本書紀巻第一聞書解説並びに影印・翻刻」（『鎌倉時代語研究』一二、平成元年七月）に、それぞれ全文が紹介されている。

（11）写真版とその解説「日本書紀私記　応永三十五年　吉叟（道祥）写」（粕谷興紀氏執筆）が、神宮古典籍影印叢刊編集委員会編『神宮古典籍影印叢刊2　古事記　日本書紀（下）』（皇學館大學刊行、八木書店製作・発売、昭和五十七年四月）にあるほか、中世神道語彙研究会編『日本書紀私見聞』（皇學館大学神道研究所、平成十六年三月）にその翻刻がある。

（12）久保田収『中世神道の研究』（前掲）第三章三を参照。

（13）坂本太郎『六国史』（前掲）一〇二頁。

（14）中村光「中世に於ける日本書紀の研究」（史学会編『本邦史学史論叢』上〈富山房、昭和十四年五月〉所収）六〇三～六〇四頁。

（15）これらの写本の複製本も作られているが、近年、京都国立博物館編『京都国立博物館所蔵 国宝 吉田本 日本書紀』（勉誠出版、平成二十六年二月）・『新天理図書館善本叢書 日本書紀 乾元本』全二冊（八木書店、平成二十七年四月・六月）などのカラー版複製が相次いで刊行され、学界に被益している。

（16）たとえば、『日本歴史大辞典』第一巻（河出書房新社、昭和三十一年五月）四九七頁の「忌部正通」（萩原竜夫氏執筆）は「内容にはその時代にふさわしからぬ点が多く、後人の仮託かとおもわれる。当時神祇官人に斎部（いんべ）氏のものはいたが、該当者は見当たらない」としている。なお、これに対する反論としては、久保田収「忌部正通の神道」（同氏『中世神道の研究』〈昭和三十四年十二月〉所収）がある。

（17）西田長男「卜部神道の成立と一条家の人びと」（西田氏『日本神道史研究』第五巻〈講談社、昭和五十四年五月〉所収）。

（18）岡田莊司校訂『兼倶本宣賢本日本書紀神代巻抄』（続群書類従完成会、昭和五十九年七月）に吉田兼倶自筆本の翻刻と岡田氏による詳細な解説がある。

（19）『沙石集』巻第一上、太神宮御事には、以下のような話がみえる（引用は、新編日本古典文学全集52の小島孝之校注・訳『沙石集』によった）。

去し弘長季中に、太神宮へ詣で侍りしに、ある神官の語りしは、当社に三宝の御名を言はず、御殿近くは僧なれども詣でざる事は、昔この国いまだ無かりける時、大海の底に大日の印文有りけるによりて、太神宮御鉾さしくだして探り給ひける。その鉾の滴り、露の如くなりける時、第六天の魔王遥かに見て、『この滴り国と成りて、仏法流布し、人生死を出づべき相あり』とて、失はしめんために下りけるを、大神宮、魔王にあひて、『我三宝の名をも言はじ、身にも近づけじ。とくとく帰り上り給へ』とこしら仰せられければ、返りにけり。

その御約束を違へじとて、僧なむど御殿近く参らず、社壇にしては経をあらはには持たず。三宝の名も正しくは言はず。仏をばたちすくみ、経をば染紙、僧をば髪長、堂をばこりたきなど言ひて、外には仏法をうとき事にし、内には三宝を守り給ふことにて御座す。故に我国の仏法は偏に大神宮の御方便によれり。

（20）西岡和彦「『日本書紀』と山崎闇斎」（『神道宗教』二五九・二六〇、令和二年十月）。

（21）松本丘『垂加神道の人々と日本書紀』（弘文堂、平成二十年七月）一七〇～一七五頁。

（22）小島憲之『上代日本文学と中国文学』上（塙書房、昭和三十七年九月）。

（23）新編荷田春満全集編集委員会編『新編荷田春満全集』第二・三巻（おうふう、平成二十六年十一月・二十七年六月）。

（24）賀茂真淵は、江戸時代中期の国学者、歌人。号は県居。国学四大人の一人。元禄十年（一六九七）、遠江国敷知郡（現在の静岡県浜松市）に賀茂神社の神職の子として生まれる。荷田春満に入門し国学や和歌を学び、田安宗武に仕える。真渕は春満や契沖の迹を受け、独自の国学を築いた。宝暦十三年（一七六三）、旅先の松坂で本居宣長と会う。隠居後は著述に専念し、多くの著作を残した。明和六年（一七六九）、七十三歳で歿している。主な著作に『万葉考』『祝詞考』『国意考』『歌意考』『冠辞考』『にひまなび』『源氏物語新釈』などがある。

（25）本居宣長は、江戸時代中後期の国学者。号は鈴屋。享保十五年（一七三〇）伊勢国飯高郡松坂（現在の三重県松阪市）の木綿商の家に生まれる。医学修行のため京都に遊学し、堀景山に入門して儒学を学ぶ一方、古学も志す。松坂帰着後は医者で生計を立てつつ、歌会への入門や『源氏物語』講釈を開始する。宝暦十三年（一七六三）に賀茂真淵と初めて対面し、翌年に入門。真淵入門後は『古事記伝』執筆にとりかかる。以後三十五年の歳月をかけ、寛政十年（一七九八）『古事記伝』四十四巻を完成させる。ときに六十九歳であった。享和元年（一八〇一）、七十二歳で歿している。宣長の研究分野は多岐にわたり、数多くの著作を残している。主な著作には『古事記伝』のほか、『紫文要領』『石上私淑言』『直毘霊』『詞の玉緒』『玉くしげ』『うひ山ぶみ』『玉勝間』『鈴屋集』などがある。

（26）「書紀の論ひ」は、『古事記伝』一之巻に収載されている総論の一つ。古来より人々は『日本書紀』を尊み「漢心」に泥んでおり、「古学」を忘れていると指摘する。そもそも『日本書紀』と、題に「日本」を付けているのは漢国に対しへつらった表現であり、論じている漢籍の潤色文は古学の害になること、漢意は人の心に入りやすく惑いやすいものであることを忘れないこと、また、『日本書紀』は漢籍と古言の表現が混ざっているため読みがたいものであるとのべている。

(27) 平田篤胤は、江戸時代後期の国学者。号は気吹之舎。安永五年（一七七六）出羽国秋田郡（現在の秋田市）の秋田藩士の子として生まれる。二十歳で脱藩し、独学によって国学者となる。本居宣長の歿後門人だが、宣長の学問方法とは異なる自説をとり、宣長が重視した『古事記』などの古典に記される古伝説には矛盾や非合理があるとの考えを示し、『古史伝』『古史徴』を著述する。天保十二年（一八四一）、幕命により著述禁止のうえ秋田藩へ退去となる。天保十四年、六十八歳で歿している。主な著作は『古史伝』『古史徴』のほか『古史徴開題記』『霊之真柱』『玉たすき』『勝五郎再生記聞』『仙境異聞』などがある。

(28) 平田篤胤『古史徴開題記』（岩波書店、昭和十一年九月）一一六頁。

(29) 伴信友「日本書紀考」（『比古婆衣』〈『伴信友全集』巻四、国書刊行会、明治四十年、のち昭和五十二年にぺりかん社より覆刻〉一の巻所収）。

(30) 『長等の山風』は『伴信友全集』巻四（前掲）に収録されるほか、日本思想大系50『平田篤胤　伴信友　大國隆正』（岩波書店、昭和四十八年九月）にも収められている。

(31) 関晃「伴信友の学問と『長等の山風』（日本思想大系50『平田篤胤　伴信友　大國隆正』〈前掲〉所収）六一四頁。

(32) 『日本書紀傳』については、明治四十三年五月から同四十四年七月にかけて、秋野庸彦（あきのやすひこ）校訂『日本書紀傳』全七巻が皇典講究所國學院大學出版部（明治四十五年二月発行の第六巻からは皇典講究所國學院大學販売所）から刊行されている。なお、『日本書紀傳』は、のちに樹下快淳編輯『鈴木重胤全集』第一～九（鈴木重胤先生学徳顕揚会、昭和十二年十一月～同十五年十一月）にも収録されている。

(33) 重胤の暗殺は、平田系の過激派による犯行と考えられている。文久元年になると、平田派の門人に急進的な人物が加わるようになる。文久三年二月、彼らの手によって等持院の足利氏三代木像梟首事件が起きると、重胤は平田派の愚行を嗤う談話を発表。これが、事件に参加した平田系過激派の忌憚にふれ、この年の八月十五日に彼らは重胤宅に押し入り、彼を殺害した。実行犯には、伊藤嘉融・梅村真一郎・青山景通・近藤太一と推測される。なお、遭難時執筆中の『日本書紀傳』三十三之巻は所在不明である。

(34) 飯田武郷の『日本書紀通釋』（大八洲學會、明治二十二年八月～同二十八年十月発行）は、寛文版本を底本とする原文を掲げ（別巻の「索引・歌文集」の口絵参照）、それに対して詳細な注釈を施したものである。最初の大八洲學會出版の分（全七十巻）は、明治二十二年八月出版の上篇之一から同二十八年六月出版の上篇之七までと、中篇之一（明治二十二年十月）・二（同年十一月）があるが、他は不明。その後、洋装活字本全五巻（発売所は明治書院、明治三十五年一月～同三十六年一月発行）が刊行され、このとき索引（発売所明治書院・六合館、明治三十六年一月発行）が加わった。のち『再版日本書紀』の書名で再刊され（発売所明治書院・六合館、全五巻とも明治四十二年十二月発行、ただし索引はなし）、さらに大鐙閣（大正十一年十二月～大正十二年四月、ただし索引はなし）、内外書籍（昭和五年、このときから索引に歌文が加わった）・畝傍書房（『増補正訓日本書紀通釋』と改題、全巻とも昭和十五年十一月発行、索引あり。昭和十七年にも重版）と版元を変え再版、戦後も昭和五十六年九月に教育出版センターより第一～第五・索引歌文集として全六巻同時に復刻されている。さらに、昭和六十年三月にも同社から重版されたが、このとき索引歌文集を「第六」と改めている。

(35) 岸俊男「『日本書紀』の注釈」（『日本古典文学大系月報』第二期第十五回配本、昭和四十年六月）一一頁。

(36) 直木孝次郎「日本書紀」（別冊歴史読本事典シリーズ6『日本歴史「古典籍」総覧』〈新人物往来社、平成二年四月〉）四〇頁。

(37) 坂本太郎氏は、田口卯吉博士の旧輯国史大系の刊行がいかに学者に便益をもたらしたかをうかがう逸話として、「それまでは図書館で『日本書紀』を見るにも、木版本三十冊を全部借り出さねばならなかったのに、座右にある活版本一冊であるむようになった喜びは、たとえようもなかったと、恩師辻善之助博士が私に語られたことがある」という辻博士の談話を紹介しておられる（同氏「史書を読む」『坂本太郎著作集』〈吉川弘文館、平成元年二月〉所収、四四八頁）。

(38) 塩川哲朗「現代の『日本書紀』研究」（『神道宗教』二五九・二六〇〈前掲〉）。

(39) 荊木美行「日本書紀研究の現在」（細井浩志他編『日本書紀の誕生　編纂と受容の

歴史』〈八木書店、平成三十年四月〉所収）。

（40）なお、大系本はその後新装版が出たあと、五分冊に再構成して岩波文庫に収録され、さらにそのワイド版が刊行され、こんにちでも容易に入手することができる。

（41）渡邉卓「国学者による『日本書紀』研究の展開」（『神道宗教』二五九・二六〇〈前掲〉）九五頁。

（42）このときの勅版神代巻が、卜部氏伝来の『日本書紀』を底本としており、開板にあたっては卜部吉田家の人物がかかわっていることについては、西田長男「吉田家における神書開版と慶長勅版中臣祓」（西田氏『神道史の研究』〈雄山閣出版、昭和十八年〉所収、さらに同氏『日本神道史研究』第五巻〈前掲〉所収）を参照されたい。

（43）日本古典文学大系67『日本書紀』上（岩波書店、昭和四十二年三月）五六頁。

（44）坂本氏前掲書、一〇三頁。

（45）塩川哲朗「現代の『日本書紀』研究」（前掲）二六二頁。

（いばらき　よしゆき・皇學館大学研究開発推進センター教授）
（うらの　あやこ・皇學館大学研究開発推進センター助教）

Research History of Chronicle of Japan (*Nihon shoki*)

IBARAKI Yoshiyuki, URANO Ayako

Nihon shoki was completed in 720. It's the oldest official history of Japan covering events from the mythical age to the reign of the empress Jitō. This book has been read and studied by many people during 1300 years up to now. In our paper, we describe how the Japanese read *Nihon shoki*. By this investigation, we were convinced the Japanese tried to ask their origins and traditions through this book. The reason *Nihon shoki* has been read for a long time is also there.

皇學館大学研究開発推進センター紀要　第八号（令和四年三月）